

教師を育てた 言葉たち

No. 016

長崎県立対馬高校 田川耕太郎先生 たがわ・こうたろう

◎教職歴27年。同校に赴任して1年目。諫早高校、長崎県教育委員会、長崎東高校教頭などを経て、初任校である対馬高校の校長を務める。令和元年度から国際文化交流科が設立され、普通科、商業科の3学科体制となり、さらなる進化と魅力化を図る。



教 師になって13年目、長崎県立諫早高校に赴任して8年目に、私は3学年主任を務めることになりました。当時の諫早高校は、尾崎健次先生、原田尚之先生、そして石山雅晴先生が進路指導主事としてバトンをつなぎ、生徒が自分のあり方・生き方を考える進路指導、諫早高校で受け継がれていく「志の教育」を完成させつつありました。

4月のある休日、自学自習のために登校する3年生を出迎えるように、「雲上蒼天」と書かれたホワイトボードが廊下にあるのを見つけました。雲とカモメの絵、そして「雲を抜けると青空が広がっている」と、受験生となった3年生に向けて、受験勉強という困難の先の喜びを示唆するひと言が書き添えられたその言葉は、石山先生の座右の銘であり、生徒も私もそれまでに何度か耳にしたことがありました。しかし、12年前のある朝、たった一度だけ目にしたホワイトボードに書かれたその言葉は、映像として、そして、せつせとホワイトボードを準備する石山先生の想像上の姿とともに、私の脳裏に深く刻み込まれました。自分の気持ちをそのまま丸ごと生徒にぶつけることも少なくなかった私にとっては、さりげなく、しかし確実に生徒の心に思いを染み込ませるような石山先生の伝え方に、生徒への向き合い方を学んだ気がしました。

思 えば、石山先生は常に真剣に、しかし遊び心を持って生徒と向き合っていました。7月の学年集会では、3年生に「受験の天王山をみんなで乗り越えよう」と、受験生としての夏の過ごし方を

説き、激励すると、その翌日、石山先生は小さく「天王山」と書かれた真っ白な模造紙を、3年生の廊下に張り出しました。そして、何日か経つごとに「天王山」の文字は少しずつ大きくなっていきました。「また字が大きくなった!」と笑う生徒たちは、石山先生とともに険しい山道を楽しみながら登っているように私には見えました。夏季休業中、1週間にわたって行われた学習合宿の最終日には、突如生徒たちが「先生方へのお礼としてみんなで歌います」と、ゆずの「栄光の架橋」を歌ってくれました。合宿をよいものにしてという石山先生を始めとする教師の配慮が生徒に伝わったからでしょうし、それを受け取る感性を持ち、感謝の気持ちを素直に表現できる生徒に育ってくれたことは、学年主任として大きな喜びでした。

翌 年度、石山先生から進路指導主事のバトンを手渡された際、私は、あの日の「雲上蒼天」の言葉のように、生徒をそっと支える存在になろうと思いました。3年生の進路通信に、部活動や学校行事で輝く生徒の写真を積極的に載せるようにしたのも、「君たちの高校生としての頑張りを、先生たちは見守っているよ」と伝えたかったからです。

あの日の朝のホワイトボードについて、卒業生と思い出話をすることがよくあります。たった1日の出来事が、多くの生徒の心に焼きついているのです。教師の言葉が、雲の中にいても明日の蒼天を信じる力、晴れた空を見上げながら「もっと美しい世界があるはず」と、より高い目標を掲げる力を育む……あの日、私は、言葉が志を育む瞬間を目にしたのです。

長崎県立対馬高校 全日制／普通科・商業科・国際文化交流科／共学／1学年約150人／2019年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、長崎大、熊本大、鹿児島大などに25人が合格。私立大は、早稲田大、立命館大、西南学院大などに延べ92人が合格。